

監督回顧録

「転換期」を問う

伴 義孝



人柄には、どちらがいいとはかぎらないものの、大別して二態があるよう思われる。ひとつは私事にかぎってはあまり語らなかったり主張しなかったりするタイプで、もう一方はいかなるときも自己本位に物事を見定めるタイプである。両者に対しては、さまざまな評価がつきまとうのだが、ここでは、その詮索を問題にするのではない。だがいずれにしても極端に偏ってしまったのではいけない。さて半世紀の記録を残すという本書の企画意図からすれば、その執筆者として、特に指定標題「監督回顧録」のような責務を負わされているときには、上記の「二態」を適切に織りまぜながら対処することが筋道だろう。本音を謂えば、私は、「私事」についてあまり語らないタイプなのだが、そんな安っぽい信条に拘泥することなく、この際、さまざまにわたって有体に語っておくことを許していただきたいと思うのである。

1. 米国生活

昭和39年は東京五輪の年である。その前年、私は、関大を卒業した。ともかく五輪出場を夢見て、私は、日本体育大学へ学士入学していた。実力不足だからその夢が実現しなかったことはいたしか

たなかったものの、そうして、「時」は過ぎていった。右膝靭帯の切断という不運に遭遇しさえしなかったならば、どうにかなったのではないかと理由をかこつけながら当時はすきんだ気分押しつぶされそうであった。だから何かの転機が必要だった。そんなとき、当時の八田一朗会長（日本レスリング協会）が、アメリカ留学を勧めてくれたのである。カリフォルニア州のコーチングアソシエーション協会関係者から留学斡旋の話があるが、どうか、と。ともかくそのような事情のもとに、渡米することになって、カリフォルニアのホーソン市レクリエーション局で研修を続けながら、レスリングコーチの仕事などに従事することになったのであった。

私の滞米中の頃の社会通念に恰好の事例がある。その頃の米国社会には、飛行機に乗るときは（公式場にでるときは）、正装しななければならない、整髪して身だしなみをただしなければならない、という常識があった。だが既に当時のアメリカでも、時代相は転換しつつあった。全米でベトナム反戦運動が席卷しだす頃には、「ヒッピー族」が出現しだして、髪は肩まで伸ばし放題、裸足で歩く、服装はキタナイ、という新風俗が若者だけにとどまらず世間に急激に広まりつつあった。だが一方で公式の場におけるネクタイと整髪（若者はG Iカットが主流）が依然として支持されていた。いわば古い潮流と新しい潮流が捻りをたててぶつかりだすその最中に、私は、米国滞在生活を送っていたことになる。ところで私の髪形は世間並みのG Iカットだったのだが、ということは、ヒッ

ピー族の出現に戸惑う側の社会通年に慣れ親しむという生活を送っていたことになる。

さらにもうひとつ、時代のある断層を紹介しておきたい。1ドルが360円の時代、私のアメリカ滞在のころの日米の生活格差は、たとえば賃金格差においても、格段に日本が劣っていた。そんなわけで、多くの留学生などは、どうにかしてアメリカ永住権を取得したいためにいろいろと奔走したりする時代であった。ベトナム戦争に参戦すれば、市民権が、貰える。そんな噂のような話が、彼らの間では、生真面目に日常的にやりとりさえされていた。すべてに、アメリカ・イズ・ナンバーワン・イン・ザ・ワールド、だったのである。

さて、関西大学で体育助手の公募があるから、応募してみろ、と推奨してくれたのは松井清大先輩であった。アメリカから書類申請したところ、脈があるから至急に帰国せよ、と知らせてくれたのも松井さんだった。こんな経緯のもとに、幸運にも、昭和43年4月から母校の体育助手に着任することができたのであった。このころ日本は高度経済成長の真っ只中であつた。大学への進学率が鰻上りのころだった。だから体育教員のポストが増えるという転換期にピッタリ合ったということだろうか。

2. 車の中で

そんなわけだから帰国してみるとやはり数年の滞米生活とのタイムラグがあつた。日本も大きく変わりつつあつた。昭和43年といえば、「全共闘」が組織された年である。「ゲバ棒」を振りかざす姿がテレビ報道や新聞で盛んに登場する異常な光景についていけなかつた。そしてかのアメリカで発祥したヒッピー風俗が、逸早く、日本にも上陸していた。そして、偏見はないのだけれども、米国滞在中にも肌で感じていたように、関西大学に勤務することになってから、キャンパスでも盛んに出くわす、ヒッピー族さながらの髪形の若者た

ちを、どうにかならないものか、と嫌悪の目でみようになっていた。わずかの滞米生活ではあつたのだが、その間の、日本の変化は、帰国したばかりの私にとって、あまりにも馴染めないことに思えた。些事にわたれば食生活事情の好転などに目を見張つたものである。



写真▷「関大会館前の乱闘」（昭和46年6月）

その頃から、東京方面での大学に端を発して、全国的に大学紛争が激化していった。そしてまがりなりにも、体育教員として、大学スポーツとも関係する生活が始まったのであるからには、この動向に、無関心であることはできなかつた。大学紛争の激化にともなつて、全国的に、大学スポーツがその渦中に巻き込まれることになつたからである。昭和43年、既に、東京の各大学では、体育会活動が甚大な被害を被りだしていた。

この潮流は必ず関西にも波及してくる、そう踏んで、その対策を先取りして考えておくべきだと論陣を張っていた人物が存在していた。関西大学体育OB会の副会長である松井清氏と北尾郁之介氏の両名であつた。昭和43年4月の初旬、アメリカでの学生スポーツ動向はどうなのか、を私に尋ねるために、その松井さんと北尾さんがやってきた。そして、懇請されることとなつた。関西大学体育OB会の事務の仕事を手伝ってくれ、と。松井さんとの人間関係もあることで、断ることは毛

頭できない。体育館での両者との会談中には、感じ取ることのできなかつた、強烈な「口説き言葉」が印象に残っている。

それは、面談後に食事に誘われることになったのであるが、松井さんが運転する車の中でのことだった。北尾さんとは、まったくの初対面である。その北尾さんが、若輩の私に、戦前から戦後にかけての、関大での体育会活動について、自己体験を踏まえながら、さらに昭和43年の関大状況の一部始終を、熱を込めて諭すように、語りかけてくれたのである。30歳前の若造に、時に頭を下げながら、協力を要請する、なかなかできることではない。強烈な言葉があった。「このままでは関大は、立ち直れなくなる」、であった。だから「力を借りたい」、であった。当時、大学当局と折衝を続けていた両氏が、既に「体育推薦入試制度」の適用の漸減方向にある事実と、機密事項ともいえるその制度廃止の途上にあることを打ち明けてくれたのである。そして、どう思うかとも質されながら、アメリカの大学スポーツの社会的評価について、教えてほしいと懇願されたのであった。時代は変わりつつある、これまでの「体育会」のままでは立ち行かなくなる。このままでは、体育OB会そのものも、駄目になってしまう。この「転換期」に、アメリカでの見聞を活かすように、力を借りたい。その懇願には、感銘するのみだった。この時点から、私の、関西大学体育OB会との深い関係が始まったのである。

3. 酒を断つ

昭和44年の我が部の状況は、当時の監督の堀江茂雄さんの表現を借りるならば、「絶体絶命のピンチ」（「30周年記念誌」）だった。それには、二つの理由がある。ひとつは、チーム力の低下であった。もうひとつは、遂に、関西大学も大学紛争の渦中に巻き込まれてしまったことにほかならない。その前年の倉橋主将の時代にも既にメンバー

不足の状況を迎えようとしていたものの、春秋リーグ戦には、苦戦しながら、「9連勝」「通算24回目」と「10連勝」「通算25回目」の優勝を飾っている。その年は堀江監督が就任したばかりだった。新体制への移行期には、すべてにわたって、清新の気風がみなぎるものである。指導陣も部員もその心意気で、堀江監督の第1年目を闘った。私も着任したばかりだった。そして、堀江さんを補佐するコーチ役の第1年目である。この昭和43年の秋の勝利での祝勝会の直後に、私は、1年間の断酒を誓った。その誓いを打ち明けたのは、堀江さんと当時のコーチ陣だけにであった。狙いは、ただひとつ、「絶体絶命のピンチ」から脱出するために、カンフル剤にならないかと願ってのことだった。私の断酒が功を奏したのでは決してないのだが、関大は、結果として昭和44年（1969）の春季リーグ戦を「11連勝」「通算26回目の優勝」で飾り、秋季リーグ戦を「12連勝」「通算27回目の優勝」で飾ったのである。秋季リーグ戦優勝の祝賀会で、私は、大いに呑んだ。1年ぶりのことであった。

4. ある決心

「30周年記念誌」のこの年の項のミダシには、「関西大学・大学紛争にまきこまれる」と歴史的事実として淡々と書かれている。だが実態は深刻であった。深刻であったばかりでなく、その後遺症が、長期化したのである。その経緯については、本書の随所に、詳述されているので重複を避けたい。体育教員として働く、私の使命を、このころから次のように定めてはいた。それには、アメリカから帰国した年の、松井さんと北尾さんとの、あの「車の中」での対話の果実が、弁証法的に、私の全身心のなかで培養されつつあったことが大いに関与している。

関西大学のこの大学紛争後遺症を、体育の立場で、とりわけ関西大学体育OB会の立場を借りて、

打破しなければならぬ、そのような「決心」が、私を、呪縛することになっていった。レスリングのことをないがしろにしたのではない。レスリングのみにこだわっていたのでは、関西大学内で、「体育振興」について、正論として語る足場さえ失うことになっていったかもしれない。そこで、この監督回顧録の場を借りながら、直接レスリングの話題に触れることにはならないものの、やがて関大レスリング部が、通算「第28回目」の優勝を成就するためにも、その環境づくりのために、私が誠心誠意に取り組んできた「ことがら」について、ここに初めての告白として、簡潔に披瀝しておくことにしたい。それは、不遜に聞こえるかもしれないが、自負してもよいと考えている私の「闘い」の記録でもある。

5. 闘いの発端

先に関西大学体育OB会関係の足跡を示しておくことにする。昭和43年前後の体育OB会は空中分解しつつあった。その危機的状況が、前出の、「車の中」での、あの対話を成立させることになったのである。松井副会長と北尾副会長の、OB会再建のために、アイデアを提供してほしい、という要請の下敷きには魅力のない体育OB会の実態があった。なぜか。体育OB会は昭和33年(1958)に発足したのであったが、その目的は、母校の体育振興を促進するために協力することにあつたものの、内実は、「体育推薦入学制度」の適用をめぐる調整組織のような認識しか働いていなかったようである。つまり、参加する各部OB会選出の関係者の関心は、何人の推薦入試適用学生を獲得することができるのか、にしかつなかつたのである。昭和45年度をもって、関西大学では、この体育推薦入試制度を廃止してしまった。その廃止に向けての漸減方式は、既に、数年も前から始まっていた。そして大学紛争の激化にともなう遂に昭和45年を迎えたのである。大方の関心はその体育推

薦制度による選手枠の獲得にしかつなかつたわけだから、制度の消滅とともに、そうした関係者にとって、体育OB会の存在意義が薄れてしまったのも当然であろう。

松井さんと北尾さんは違った。昭和33年の体育OB会の結成時の当初から、二人は、副会長を務めている。いわば生き字引のような存在だった。そしてご二人は、全国アンクルで、各大学の体育OB会と体育会活動の関係の在り方にも目を向けていたのである。このままでは、関西大学体育OB会活動の衰退とともに、関大スポーツが駄目になってしまう、と憂いていたのである。手を打たなければならない。

関西大学における大学紛争では、ゲバ学生は、その重点的攻撃目標を、「体育推薦入学制度」において、その廃止を訴えることをやり玉にして、紛争誘導の突破口を切り開く戦略を立てていた。あらぬ噂も意図的に流された。それも大学内の教授連中の内輪にまで忍び込んできていた。そして学内世論には、「体育」をスケープ・ゴートにする空気が、日増しに充満しつつあった。その流言のひとつには、体育OB関係者が「体育推薦入試制度」を利用して、金品を強要するなどの不正を働いている、というような陽動作戦もあった。

松井さんと北尾さんの眼目は、そうした陽動作戦に、効果的に対抗することに置かれていた。私も、即座に、同意した。その陽動作戦を野放しにしていたならば、本当に「体育」が、スケープ・ゴートのままに終わってしまい、二度と立ち上がれなくなる。関西大学におけるこの陽動作戦は、大学紛争後遺症として、実に、つい最近まで続いたのである。どうすれば、いいのか。まず魅力ある体育OB会づくり戦略が必要だった。

6. 手始めに

まず戦略は、関西大学体育OB会組織に、社会性を注入することから始まった。「推薦枠」にし

か目が届かないという自己利益のみを追求する「井の中の蛙」状態の時代は、もう、終わったのである。大学体育で、大学スポーツで、何ができるのか。世間は、そこに、何を期待しているのか。そして、これから大学スポーツを担ってくれる青年のために、どのような環境を用意すればいいのか。語るべきこと、変革すべきこと、は多い。

その頃、関西学院大学もまた、関西大学と同じような軌跡を辿りつつあった。期せずして、両大学の体育OB会は、魅力ある「会」づくりとその運営をとおして、母校における「真正な体育理解の高揚」を促進させることを旗印に、再結集することになっていた。



写真▷初期の頃の関関体育OB「勉強会」

第1弾戦略は、なにかにつけての最大のライバル校である関西学院大学体育OB倶楽部との、胸襟を開いた「勉強会」から始まったのである。その関学では、米田満さん（関西学院大学体育教授・アメリカンフットボール部OB）が、OB倶楽部の幹事長を務めていた。彼の指導力のもとに、関学では、関大より一歩先駆けて、魅力ある「OB会」づくりを開始していたのである。かつて両大学は関西の学生スポーツの両雄と評価されていたのだが、大学紛争で、潰滅的な打撃を被ってしまったのである。お互いに傷を嘗め合うために集

まったのではない。将来社会に即応する「大学スポーツ」の再構築に向けて、お互いに研鑽しよう、と両雄が手を結んだのである。そして現在なお、その実効は、稼働している。思えば、大学紛争という契機がなければ、このような「結びつき」は生まれてこなかったのではないか。この「2大学間の研鑽の場」の構築も、また、日本の大学スポーツ史上希有のことではある。

地道に底力を蓄えておく。それしか打開策はない。関学から学んだ最初の知恵である。「OB会組織の再編」「OB会名簿の発刊」「OB会懇親ゴルフ大会の開催」「関関両大学OB懇談会の開催（毎年1回・のちに関関同立4大学懇談会に発展）」などなど新機軸を打ち出すことになったのである。多くは、関学から、学びとったことだった。次第に「大学スポーツ」は、こうあるべきだ、の論者が集まるようになってきた。その当初からの若手同志には、若佐清三郎会長（昭和53年死去）のもとに、松田秀司、寶田重幸、鳥居鋭徳、田中章博、船田征義、岩田家正、川口浩などがいた。ときには合宿学習会も何度となく開催したものである。やがて関西大学体育OB会は次々と新機軸を展開することになる。それまでに「車の中」の対話から10年の時が流れ去っていた。だが、大学スポーツは「こうあるべきだ」問題を手弁当で論じてきた関係者の情熱で、その新機軸のすべては結晶しつつあった。それまでの「十年間」が培ってきた地力の結果であった。私にとってその10年間は大きい充電期間となっていた。かかる情熱の仲間に支えられながら、不慣れな書類づくりも含めて、ただがむしらに、関西大学体育OB会事務局長として、勉強させられる日々であった。

7. 総合関関戦

世界の大学スポーツ史にも、日本の大学スポーツ史にも、存在しない画期的な大学行事が始まることになった。その下地は、関学の米田満幹事長

を中心にするグループと、関大の「情熱の士」との「勉強会」において、関大側の提案として、始まったものである。提案に諸手を挙げて賛同してくれた関学側は、その行事のネーミング「総合関関戦」も、その発起主旨の草案も、すべてを関大に任せてくれた。度量の大きいことである。「俺が、俺が」が働いていたならば、この企画は、成就することはなかっただろう。関学の米田幹事長には格別の敬意を表しておかなければならない。さらに病気療養中だった、岩佐関大体育OB会会長にも、最大の敬意を表しておかなければならない。企画の精神を一見するなり、すべてを任すと即断で全権を委任してくれたからにはほかならない。ところでそれまでの「勉強会」は、この企画を実現化するための舞台づくりとして、「関大・関学体育会OB懇談会」に発展することになった。いよいよ両大学の働きが社会性を膨らませることになったのである。その経緯を『関西大学百年史・通史編下』で再確認しておくことにしたい。

大学スポーツの振興に寄与するために発足した関西大学体育OB会は、ライバル校の関西学院大体育OB倶楽部に働きかけて、昭和52年5月10日、懇談会を催した。関大体育OB会からは副会長・松井清、同・北尾郁之介、理事長・寶田重幸、常任理事・平原豊弘、事務局長・伴義孝、関学OB倶楽部からは副会長・木村正春、幹事長・米田満、常任理事・大西広太郎、同・瀬川幸一、同・森田満男、同・砂川義彦が出席した。両大学は関西学生スポーツ界を二分する勢いで競いあい、クラブ単位で行う定期戦は学生だけでなく市民からも「関関戦」と親しまれてきた。その伝統ある関関戦の気風とスポーツマンシップを涵養するため、定期戦を統合し活性化の方策を共同で研究することとなった。さらに53年5月29日、関大校長中義勝、理事長久井忠雄、関学理事長久山康以下、両大学の首脳陣が将来計画について熱のこもった話し合い

を行った席上でも総合関関戦を実施したいということで意見が一致した。こうして総合関関戦の構想は両大学OB組織で検討され、同年9月29日に開かれた第二回関大・関学体育会OB懇談会の席で公表された。この会合には、関大から学長中義勝、理事長久井忠雄、体育OB会長大島鎌吉とOB約50名、関学からも学院長小寺武四郎、理事長久山康、OB倶楽部会長澤田修太郎のほか、ほぼ同数のOBが出席した。総合的定期戦はわが国で四百を数える大学体育会史上初めての試みであり、学長、OB会長は新しい形の関関戦のスタートを歓迎して次のように語った。

〔中 義勝・関大学長〕

ライバル意識が強い関関の学生諸君がぶつかりあうことによって、母校愛が養われればいいことはない。学風の振興に役立つのではないか。

〔大島鎌吉・関大体育OB会長〕

この関関スポーツの祭典が知恵袋を入れる器が何であるか、丈夫ですぐれた肉体であることを世に示すことになるだろう。ここで生まれたエネルギーを土台に飛躍してほしい。

〔小寺武四郎・関学院長〕

親善も大切だが、鍛練する心も大事である。この定期戦こそ新しい時代における学生スポーツの開拓になると思う。

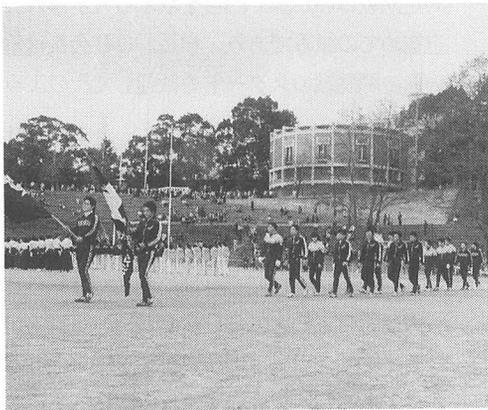
〔澤田修太郎・関学OB倶楽部会長〕

弱い現役にカツを入れるために持ち上がった話が、関関総合定期戦の形になって現れたのだから、うれしい。ぜひ、東の早慶戦以上のものへ持っていきたい。

「車の中」からちょうど10年。大学紛争の後遺症を癒す、端緒につく「時間」に、それだけ必要だった。それまでは、両大学ともに、体育振興を持ち掛ける「話」には、敬遠する空気が蔓延していた。公式の場での発言には、大学首脳陣は、学内世論を気づかって、特に慎重だった。誰もが、

話にさえのってくることも、極力、逃げるように控えていたのだ。この頃はまだ、「体育推薦入学制度」の復活を声高に要請することは、禁句であったのである。

だがこれで、きっかけができた。その手応えは間違いなく掴むことができた。爾来20年間、総合関関戦は、毎年両大学キャンパスで開催されており、1997年にはその第20回記念大会が関学キャンパスで盛大に開催されたのであった。



写真▷関大で開催された第1回総合関関戦

8. 続出する新機軸

歴史は繰り返す、という言葉がある。それは多くは人間の性がなせる生臭い悪行のたぐいにおいてである。ところが、社会変動に関わる進化論的歴史的事実においては、決して、二度と同じことが再現されることはない。関西大学の歴史上には、その功績において、二度と出現しない人物が何人が存在している。

そのなかでも、傑出している人物が、我が関大のスポーツ仲間が存在している。前出の大島鎌吉その人である。東京オリンピック日本選手団長、東京五輪強化委員長、オリンピック平和賞受賞者、日本のスポーツの再建者、などなどの横顔をもっている。これ以上の説明は要らないだろう。その

大島さんが、岩佐清三郎会長のご逝去にともなって、関西大学体育OB会長を、引き受けてくれることになったのである。そしてそれからの10数年間は、私の「千里庵」詣が、日常生活の一部となったのである。多くを学んだ。対話があった。スポーツはどうあるべきか、大学スポーツはどうか、世界のスポーツは、大学体育はどうか、議論が百出し、果実は何千倍にも膨れ上がった。大島さんのもうひとつの顔には、大阪体育大学の、創設に関わったという経歴がある。副学長をはやくに勇退していたその頃の大島さんは、特別待遇教授として、大阪体育大学で週一回の講義を担当されていた。本宅は東京だったが、週に一度は必ず大阪にやってくる。その本拠地が「千里庵」なのだ。授業日の前日か翌日に決まって千里庵を訪ねて、鍋をつつきながらの、体育放談に、スポーツ放談に、花を咲かせたものであった。

以後は「先生」と呼ぶことにしたい。その大島先生との至福の邂逅がなかったならば、そのうちの私の「発想」のすべては生まれてくることはなかっただろう。それほどにすべてにわたって学ぶ日々だった。「千里庵」の対話からヒントを得て、関西大学体育OB会の仕事として、実現した「新機軸」を羅列して紹介しておきたい。

- ▷ 総合関関戦・健康マラソン大会の発案創始（昭和55年）⇒ 学生だけでは広がりやすい。市民を巻き込もう。この企画は、大学開放の、地域住民を対象に考案された。毎年総合関関戦時に実施されるこの行事も日本で希有のものである。
- ▷ 関西大学代表選手証の発案創始(昭和55年) ⇒ 体育会で4年間を鍛練した全学生に、体育OB会が、「選手証」を交付する。この事業も日本では関大だけの実施である。アイデアの源泉はアメリカの「バーシティ・チーム・レター」にある。
- ▷ タートルマラソン大阪オープン大会の開催

(昭和58年) ⇒ 大島先生の「1982年度オリンピック平和賞受賞」を記念して体育OB会が先導した「OPT行事」の一環である。

- ▷ 国際シンポジウムの開催(昭和58年) ⇒ 「OPT行事」の一環。「オリンピックと国際平和」と題して、次の陣容で開催して大きな反響を国内外で呼んだ。

総合司会者：北出清五郎(NHKアナウンサー)・コーディネーター：飯塚鉄雄(横浜国立大学教授)・同：波多野義郎(東京学芸大学教授)・基調発言者：久井忠雄(関西大学理事長)・問題提起：ヴェイリー・ダウメ博士(IOC委員)・同：古在由重(哲学者・平和運動家)・同：アーノルド・フラス博士(オレゴン大学体育学部副部長)・孫基禎(韓国NOC常任委員・ベルリン五輪マラソン金メダリスト)・討議者：大島鎌吉・同：岩田幸彰(JOC常任委員)・小野勝次(数学者)・同：富塚三夫(日本労働組合総評議会副議長)・同：五十嵐敬郎(大阪青年会議所常任理事)・同：三輪昌子(生活文化研究所常任理事)からなる内外の各界の専門家で構成。

- ▷ オリンピックと世界平和「大阪宣言」の採択(昭和58年) ⇒ 「OPT行事」で採択。その宣言をIOCに送付。
- ▷ 大島鎌吉スポーツ文化賞の発案創始(平成元年) ⇒ その経緯と内容については、本書の「通史」欄に詳述してある。

いずれの「機軸」も自画自賛してよい企画であったし、成果を全うすることができた。結果の見方もいろいろあってよいとも思う。しかし体育OB会が一丸となって成しえたこの諸事業が、確実に残した、足跡は何であったのか。その首尾の最たるものは、なんといっても、関西大学内世論が、大学スポーツをある種の偏見で見なくなったことにある。大学紛争からこちら、「体育振興」の声をあげれば、「ゲバ棒学生」の攻撃目標となった、

あの右翼体制の復活は駄目だ、などとのヒソヒソ声根強くあった。だから時期尚早だ、とはぐらかす、当局の態度が硬化しつづけていた。そうした何かを悪者仕立てにしておかなければ、自分の立場を守れないという姑息な空気が、大学内に長らく蔓延していたのだが、一連の体育OB会「新機軸」の展開につれて、見事に氷解していったのである。体育は、中々に、やりよる。しかもその戦略は、正道を、歩いている。認めなければ、立場が、逆転する。さまざまな読みと、評価があった。そして環境が整いつつあった。大学で、時代に即応する「スポーツ推薦入学制度」の導入を公然と語りうる空気が、ようやく漂いはじめたのである。大学紛争の勃発から20年が経っていた。そして、やっと、その制度導入が特定の数部に適用されることになっている。やがてレスリングにも適用されることになることを願っておきたい。

9. 虚心坦懐

私の本業の方にも難題が山積していた。つまり、「体育」稼業にである。高度経済成長に振り回され続けてきて、大学の対応が、その成長速度についていけないままに、諸種の改革を余儀なくされつつあった。その大学改革動向は、ときに世間並みに働いて、弱者を切り捨てるというリストラ志向に向かうことが常であった。特に近年になってから、時代に逆行しているとの批判も指摘されているなかで、教養教育の切り捨て改革が、全国の大学で進行してきた。関西大学でも、その動向は、この20年間にわたって、じわりじわりと体育にも及んできつつあった。これにも負けてはられない。関西大学の建学の精神は、「学の実化」にある。すなわち「学理と実際の調和」「国際精神の涵養」「外国語学習の必要」「体育の奨励」の4本柱がそれである。その学是に照らしても、体育教育を切り捨てるような教育改革の進行を、阻止しなければならなかった。

この闘いにも、20年という、時間を要した。そして結果は、いまのところ、関西大学における保健体育教育は、内外の関係者の誰もが認める、「実質」と「制度」を維持することができている。この経緯にも、いくばくかの貢献をしてきたのではないかと、私は 虚心坦懐に自負している。

だがこの大学教育改革に関する闘いもまだまだ続くだろう。さらに体育会系大学スポーツの在り方に関する闘いも続くだろう。少子化現象や大学進学人口減少などといった物理的な要因だけではなくて、人間の生きざまも含めて、大学が変わらざるをえない実情が膨らんできているからだ。

そこにスポーツがいかなる意味を担いうるものか、その根拠が根こそぎに駄目になってしまうような事態になってしまったならば、もはや、「関大レスリング復活」の環境も消滅してしまうことになってしまう。大学に務める私の職責は、回りくどくあるようだが、実のところ、その環境をいかに維持するかにかかっている。日本という、この国のかたちも、いま変わらざるをえない大転換期にある。大学もこの潮流から逃れることはできない。大学スポーツにとっても、我が関大レスリング部にとっても、その時代状況の直中であって、立ち足かかる課題に対する認識を見誤ってしまえば、何も見えてこなくなるだろう。

敬愛する人物のひとりである関学の米田満先生は、一昨年、定年で関学の体育教授の職を辞している。その米田さんは、あの天下に鳴り響いた、関学アメリカンフットボール部の育ての親だった。平成3年(1991)2月、『関西学院大学アメリカンフットボール部50年史』が発刊された。その編集責任者である米田さんが、「あとがき」の冒頭に、こう書き出している。

「50周年を前にしてチームは関西リーグ第6位という思いもよらぬ凋落をみせた。関学フットボールは、これからどう進んでいくのであろうか。50周年はまさに決定的な年となった。」



写真▷アジアレスリング連盟事務総長として国際レスリング連盟総会に出席の伴さん(中央)

関西大学レスリング部は、創部50周年目のこの年、西日本学生リーグにおいて、1・2部通算の最下位という記録しか残すことができなかった。しかしながら、この逆境は、はねかえすほかに道はない。どう取り組むのか。やりがいのある、やらねばならない、大きな仕事ではある。この苦境の胸の内と、前出の私の「告白」の真意とを、大学スポーツの在り方を求めて呻吟してきた米田さんならば、きっと理解してくれることだろう。

関西大学レスリング部監督
 関西大学レスリング部総監督
 大阪レスリング協会理事長
 西日本学生レスリング連盟理事長
 西日本学生レスリング連盟副会長
 全日本学生レスリング連盟副理事長
 日本レスリング協会理事
 日本レスリング協会審判委員長
 国際レスリング連盟特級審判員
 国際レスリング連盟名誉審判員
 アジアレスリング連盟事務総長
 (歴任)

(完)